

「わたしたちの牧場ー福島県山木屋牧場」

生産者・消費者の協同でつくりあげたものを破壊した福島第一原発事故

2014 年 1 月 30 日

原告 大石光伸

福島県川俣町山木屋。飯館村と浪江町に接する阿武隈山系の峠に「私たちの」牧場がありました。「山木屋みちのくグリーン牧場」です。

30 年前ヨーロッパの酪農に学んで帰ってきた高橋さんが山を開拓し、牛を放ち牛の蹄で山を耕してゆく「蹄耕法」、草を喰み糞を土に返し土づくりをする・・・循環型農業の理想としての酪農を始めました。牧場内にプラントを作りました。チーズ作りから始まりましたが、常総生協はその牛乳を分けてもらうところから牧場づくりにご一緒しました。



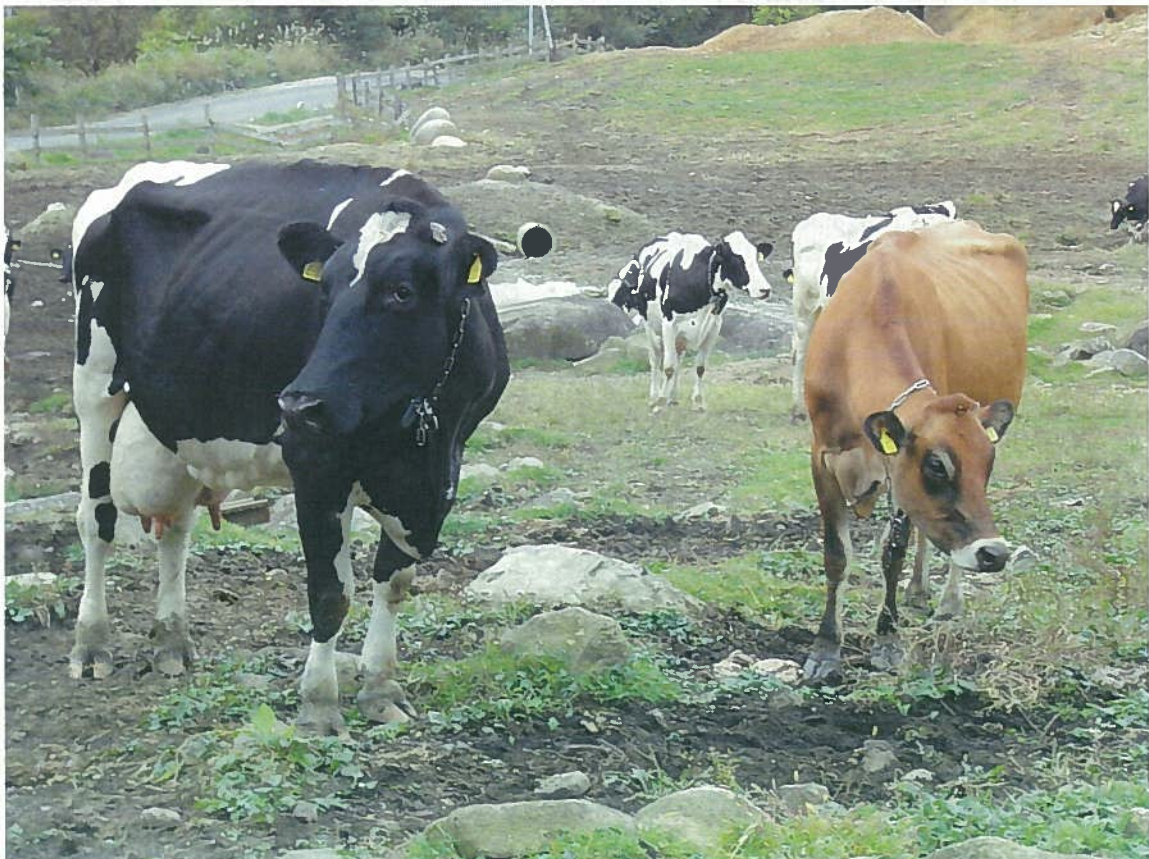
わたしたちの協同の牧場 山木屋牧場



この牛乳やチーズを頂いて子どもたちは大きくなった



森の中をゆったり歩いて草を食む牛たちをログジから眺める



「蹄耕法」による開拓・・・山に牛を放牧し、草を食み、牛糞は土に還り、蹄で耕され、再び草が萌える。酪農は典型的な循環型農業。時間をかけて牛とともに耕してきた土壌・牧場は、「放射能汚染されたら別な所で酪農やれば いいじゃないか」というようなものではない。

三春から北に上がる 349 号線や、浪江に降りる富岡街道 114 号線を何度行き来したことでしょう。夏は爽やかですが、冬は厳しい自然で、夕方雪の降る峠を下って帰る時の心細さは今でもよく覚えています。

牛たちは昼は山に登り、のんびりと草を食べ、乳が張る頃になると列をなして山を下ってきて自分たちで順番に牛舎の自分の位置に入り、乳を搾ってもらいます。ほとんどの牛が山の上で自然分娩です。生まれたばかりの仔牛は母親につつかれながら立ち上がり歩き始めます。

牛たちの乳は牧場内のプラントでノンホモ牛乳として瓶詰めされ、この牛乳で私たちの何百、何千という子どもたちが大きくなりました。組合員もキャンプをしました。搾ったばかりの乳でフレッシュバターもみんなで作りました。裏の高太石山への山登りもしました。キノコ狩りもしました。

福島山木屋牧場はその自然と食を通して「共にある」生産者と消費者のかけがえのない牧場でした。



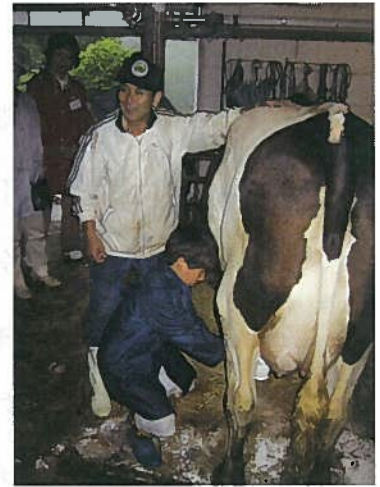
わたしたちの牧場 山木屋グリーン牧場での夏のキャンプ



牛の背中に乗って



搾ったばかりの牛乳を頂く子どもたち



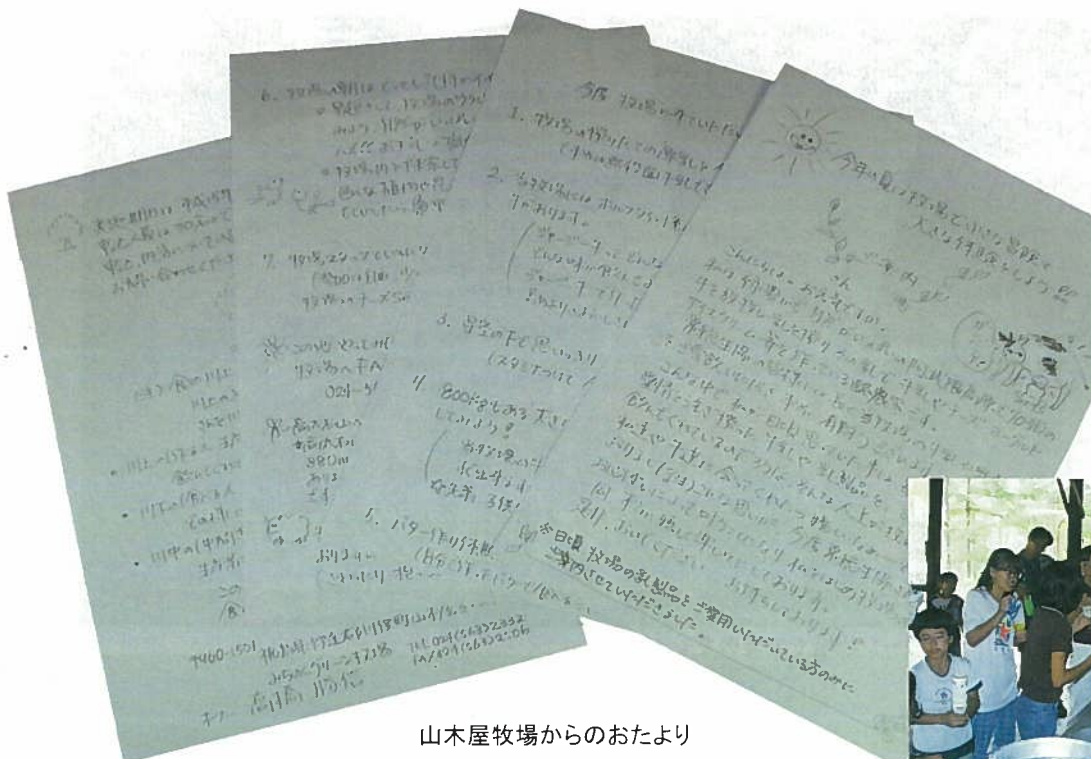
高橋さんに乳搾りを教わって子どもたち



牧場でのキャンプの様子



山羊と遊ぶ子どもたち



山木屋牧場からのおたより



牧場でのフレッシュバターづくり

2011年3月、悪魔の放射能が富岡街道を舐めるように駆け上がり、私たちの牧場へも襲いかかりました。

牛たちは夜も昼も牛舎に閉じ込められ、ストレスが溜まり体調を崩して次から次へ倒れてゆきました。出産直前の牛を栃木の知人の牧場に預けたのですが、周囲から「福島を預かって、放射能が出たらどうするんだ」と責められ、出戻り出産しました。牧場の仔牛たちは白河牧場に預かってもらいましたが、責任持てないということで売ることになりました。

生協では3月17日から宮城の被災地に食糧を持って入りはじめていましたが、福島には遅れて、山木屋牧場に入れたのはなんと4月2日でした。ガソリンと安全な水がないということで、消防署に許可をとりドラム缶にガソリンを積み、水は当時ペットボトル騒動がありましたが、組合員が「私たちは大丈夫だから被災地に持って行きなさい」とのことで、ありったけのペットボトルを3トントラックに積んで、山木屋牧場に入りました。牛たちの大きな目は潤んで、あるいは茫然として焦点が定まらない牛も。みんな泣いているのです。

4月11日飯館村と共に私たちの牧場も「計画的避難区域」に指定されました。

牛たちを皆処分し、ようやく6月牧場を撤収しました。牧場にいっしょにいた山羊も犬も猫もウサギもリスもみな離散しました。

25年来、牛の乳を頂き生産者とともに命を育んできた、かけがえのない「私たちの牧場」の撤収でした。



お母さんの険しい顔。沢水が人も牛も飲料水だった。3トントラックにペットボトルを積んで牧場へ(2011年4月2日)



牛がいなくなった牧場に佇む高橋健司さん

代わりにモニタリング大学連
合と名乗る人々が踏み入り、放射
能調査のための無機質な冷たい
機器が牧場じゅうに設置されま
した。悔しくて、悔しくて。



放射性物質による環境影響対策基盤確立 モニタリング大学連合チーム



立入禁止の牧場ロッジ前で空間線量と土壌を採取する高橋さん親子



牧場に設置された機器を眺めるお母さん



放射能を調査する機器が牧場のいたるところに設置された。草を食む牛はもう一頭もない牧場にて高橋さん親子。
(2011年7月31日)



キャンプの記念撮影をした国道 114 号線牧場入口はもう草が生い茂って牧場とはわからない(2013 年 8 月)

後を継いだ息子さんの高橋健司さんは、川俣町の臨時雇用として山木屋地区の見廻り警備員をしています。家族で生協のある茨城に引っ越してくるよう勧めたが、おばあちゃんの介護があるのでお母さんが離れられないと。牛乳プラントの工場長はじめ従業員は全員解雇離散しました。牧場を手伝っていた娘さん家族は愛媛に避難し、そこで新たな生活を始めることになりました。



高橋健司さん。原発事故さえなければ家族・親戚、そして消費者と共に牛飼いをしていたはずなのに・・・。

「いのち育む食を生産者と共に」・・・一人ひとりが私たちみんなのかけがえない子どもたち。その子らに乳を分け与えてくれた牛たち。自然とともに牛を育ててきた生産者。その子らに牛たちに放射能を降り注ぎ、「土は宝」と土作

りをしてきた農民や酪農業と共にある母なる田畑・森・牧草地を汚染し、連なる海へも放射能を垂れ流す。私たちにとって大切な生産者はその生産を続けることができなくなり、人生もくるってしまった。親戚もみな離散してしまった。もとに戻してほしい。それだけです。

放射能による被害は、農業者が出荷規制された経済的損失では決して測れません。「社会通念上容認できる」とか「できない」などという議論がなんと空虚か。

私たちは、みんなで大切にしてきたものをことごとく汚染し破壊した原発は許しません。喪失感だけでなく、かつて「あんたらの母子に水銀母液ば飲ませてやる」とチッソ役員に迫った水俣の患者さんと同じ気持ちです。

原発事故－放射能汚染は、目に見えないかけがえのない価値を含めてあまりに失うものが多い、とりかえしのつかないものです。

二度とこのようなことは繰り返してはなりません。